書き抜き読書ノート 1085	2011 年 9 月 15 日

松浦晃一郎著「国際人のすすめ―世界に通用する日本人になるために―」静山社 2011 年 7 月 6 日刊を読む

語学力が基本

１.「日本に来たら日本語を話せ」は時代遅れ

（1）グローバライゼーションの進展により、あらゆる面で世界の人との交流が盛んになりました。日本人にとって外国語ができることの必要性はますます高まっています。とりわけ国際用語となっている英語については、読み、書き、話せるに越したことはありません。

（2）外国で働くことを目指している人、あるいは外国人に交じって働きたいと思っている人であればなおのこと、学生時代に英会話をしっかり学んでおくことが必要です。ここで言う外国で働くとはグローバル社会を生きるという意味です。私の若いころ、60 年ほど前は、外国で働く日本人と言えば、政府関係では外交官、民間企業では商社員など非常にかぎられていました。しかし最近では、政府のあらゆる部門で海外派遣が行われていますし、企業でも商社のみならず多くの企業が外国との取引を進め、現地に事務所や工場を設置するようになりました。また日本の NGO のメンバーも、広く海外で活躍しています。このような職場で働く人に必須なのが、コミュニケーション・ツールとしての英語なのです。

（3）それでは、外国に行くことも外国との取引も考えていない一般の日本人は英語などできなくてもいいかと言うと、そうではないのです。いま日本には、200 万人を超える外国人が滞在しています。日本で生活するからには日本語を勉強するべきとも言えますが、現実問題としては日本語のできない外国人は大勢います。

（4）これは、日本語が日本だけが使う言語であることに起因していて、ここに、英米のほかにカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、フィリピンなど、多くの国で使われている英語との違いがあります。日本語が国際語となれない理由も、実はここにあるのです。ただ一国でしか使えない特殊な言語より、汎用性の高い言葉を覚えようとするのは、人間の心理としては当然のことでしょう。こうした日本を訪れる外国人と接するには、やはり多少でも英会話ができるほうが便利です。

（5）日本政府は、日本を訪れる外国人観光客の数を、年間 2500 万人、さらには 3000 万人に引き上げることを目標にしていました。これは大変によい目標だと楽しみにしていたのです。しかし、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災により、日本への訪問者は減少傾向を示しており、残念ながらこの中期目標の達成は先送りとなることでしょう。

　いずれにしても、日本に再び観光客を呼び寄せるためには、日本の魅力を外国にしっかりと売り込むことが必要となります。しかし、日本人の皆がいま一度考えてほしいことがあります。それは、日本を訪れる外国人が、日本人は非常に礼儀正しいが英語が通じないので困ると、口を揃えて言うことについてです。日本が観光誘致に力を入れるのならば、一般の人の英語力向

上にもっと力を入れなければなりません。ユネスコ事務局長時代、私は年に 1、2 度は日本を公式訪問しました。その際には、ユネスコのスタッフ 2、3 名(おおむね外国人女性)が私に同行しました。彼女らが東京で地下鉄に乗って行き先を聞いても、道で場所を尋ねても、片言の英語にしろ応えが返ってきたことは稀だったと言うのです。

2.「英語教育を小学生から」に賛成

(1)英語を母国語としない国は世界中にたくさんあります。しかし、多くの人の話を総合すると、世界で日本ほど一般の人が英語を話せない国は少ないようです。その中にあって、日本で小学校 4 ～ 5 年から英語を教えることについて賛否両論に分かれていると聞き、驚きました。それも、外国で教育を受けた日本人の中に反対する声があると聞いて、なおさらびっくりです。反対派の言う、日本語は奥行きの深い複雑な言語なので、まずは日本語をしっかりマスターすることが重要であり、その上ではじめて英語は勉強すべきもの。それは小学校 4 ～ 5 年生では早すぎるという意見は、残念ながら私には理解できません。

(2)私が中国で経験したことをお話しましょう。

(3)ユネスコ事務局長時代に、東アジア 5 か国(中国、モンゴル、韓国、北朝鮮、日本)の子供たち約 200 名を、毎年一度、これら 5 つのいずれかの国に集まってもらって 3 日間にわたり文化祭を開くという催し物を始めました。この催しの一環として中国北東部にある瀋陽で児童文化祭を開いた際に、30 代半ばと見られる中国人女性が案内役として私に同行してくれました。瀋陽の中学校の英語の先生でした。非常に綺麗な英語を話すので、アメリカにでも留学したことがあるのかと聞いたところ、そうではなく瀋陽の高校を出た後、北京の語学学校で英語を勉強したと言うのです。外国へは一度も行ったことがないとの答えを聞いてびっくりしました。

(4)彼女によれば、瀋陽では―他の主要都市もそのようですが―かつては中学 1 年生から英語を習いはじめていたのですが、それでは遅すぎるということでいまでは小学校 1 年生から英語を教えるようになったとのことでした。彼女いわく、英語は国際用語であるばかりでなく、これほど外国人が中国の各地を訪れるようになった現在、これらの人と英語で応対ができないことは単に恥ずかしいばかりでなく、せっかく訪れてくれた外国人に大変な不便をかけることになる。だから英語を話すことはどうしても必要だと一般の中国人も考えている。瀋陽でも父兄が一致して子供たちは小学校 1 年生から英語を学べるようにしてほしい、と要求したのだそうです。

(5)「中国語は日本語のようにカタカナひらがながなく、漢字は戦後簡略化したとはいうもののまだまだ複雑で難しい上に、長い歴史のある中国文化もある。だから、子供たちはまず中国語と中国文化をしっかりと学ぶ必要があり、小学 1 年生から英語を教えるのは早すぎる、という声はなかったのか」と質問をしたところ、彼女は「たしかに中国の文化と中国語を勉強するのは、中国の子供たちにとっては非常に大切なことです。でも、それと並行して英語を勉強することは同じように重要なことと私たちは考えます。ですから、中国では小学 1 年生から英語を勉強することになったのです」と、明快に回答してくれました。

3．「聞く」「話す」にもっと重点を

（1）私は、日本でも小学 1 年生から英語を学ぶべきと言うつもりはありません。しかし、できれば 4 年生、少なくとも 5 年生からは始めるべきだと考えます。もちろん、そのためには正確な英語を話せる教師が必要で、そういった教員の養成が課題となるでしょう。ここで私が強調したいのは、重要なのは正確さだということであるのです。流暢である必要はありません。

（2）学校での英語教育については、どこに重点を置くかが常に話題となります。私の時代はまだ終戦直後でしたが、英語は中学 1 年生から必須科目でした。授業では英文を読むことと、その関連で文法を学ぶことに重点が置かれていました。こうした教え方は、それはそれで一つの正しいアプローチであったと思っています。やはり外国語を習得しようとすれば、まずは文法を学ぶことが必要です。しかも中学 1 年生から学ぶのであれば、文法から入るというのは有力なアプローチの一つだと思います。

（3）しかし、小学 5 年生を起点とすればアプローチが違ってきて然るべきで、まず英語を聞いたり話したりすることに重点を置くべきです。簡単な文法を習得することはよいと思いますが、あまりにも文法重視に傾くのは正しいアプローチではないでしょう。

（4）私が学んだころの日本の中学、高校の英語教育は、試験も常に文法に関することが中心で、それも重箱の隅をつつくような細かな点を習得することが求められました。もっとも、私はそういうことが得意で、英語では常にクラスで最高点を取ることができていました。しかしこれは、いま考えても行きすぎです。やはり言葉というものはもともとコミュニケーションの手段であって、その中心は話したり聞いたりすることなのです。英語教育においても、ある程度文法を習得した後は話したり聞いたりすることに重点を置くべきでしょう。

（5）先に触れたように、日本を訪れる外国人が、日本人と英語でコミュニケーションが取れないと嘆くのは、決して日本人が不勉強というわけではなく、学校で学ぶ英語が読むことに偏っているため、聞いて理解する能力、そして話す能力に劣ってしまうからなのです。

（6）日本に帰国して大学生や企業の新人社員を前に講演するときは、常に英会話を習得することの重要性を強調しています。あるところで新入社員約 400 名に対して講演をした際、5 年以上英語を学んだ人は手を挙げてくださいと聞いたところ、1 人の例外もなく全員の手が挙がりました。続いて外国人と英語でコミュニケーションが取れる人―英語自体は上手でなくても意思疎通が図れれば十分であると付言―と尋ねたところ、勢いよく手を挙げた人は 3、4 人で、次いで恐る恐る 7、8 人と、合計でもやっと 10 人余にとどまりました。残りの大半は体裁の悪そうな表情を浮かべながら周りの人を見回していました。

5 年も英語を勉強していながら一応のコミュニケーションが取れる人が、400 人中わずか 10 名余りとは、大変寂しい思いでした。

（7）しかし私自身を振り返っても、高校卒業の段階で 6 年間英語を勉強していたものの、とても英語でコミュニケーションを取れるレベルには達していませんでしたので、このときの大半の若者と同じような反応を示したことでしょう。

［コメント］

子どもたちになぜ英語を学ばねばならないのかを教える立場にある人には、前ユネスコ事務局長の松浦先生の御説明はとても参考になる。本書は、ユネスコ関係者のみならず、教育にたずさわる人すべてに読んで頂きたい。

－ 2011 年 9 月 15 日林　明夫記－